



コスモ石油ルブリカンツ株式会社

## 安全データシート

### 1. 化学品及び会社情報

製品名	コスモフルードH Q 4 6	
製品コード	3544020	
作成日	2025/04/01	
会社情報	会社	: コスモ石油ルブリカンツ株式会社
	住所	: 東京都港区芝浦一丁目1番1号
	担当部門	: 品質保証部門
	電話番号	: 03-3798-3875 0120-154-899
推奨用途	: 難燃性作動液	
使用上の制限	: 推奨用途以外への使用は禁止する。	

### 2. 危険有害性の要約

#### 【GHS分類】

物理化学的危険性

GHS分類基準に該当しない

健康に対する有害性

皮膚腐食性／刺激性 : 区分2

眼に対する重篤な損傷性／  
眼刺激性 : 区分2

特定標的臓器毒性(単回ばく露) : 区分1(血液系、中枢神経系)、区分2(呼吸器系)、区分3(麻酔作用)

特定標的臓器毒性(反復ばく露) : 区分1(呼吸器系、中枢神経系)

環境に対する有害性

水生環境有害性 短期(急性) : 区分3

水生環境有害性 長期(慢性) : 区分3

#### 【GHSラベル要素】

絵表示



注意喚起語 : 危険

危険有害性情報 : (H315) 皮膚刺激  
: (H319) 強い眼刺激  
: (H336) 眠気又はめまいのおそれ  
: (H370) 臓器の障害  
: (H371) 臓器の障害のおそれ  
: (H372) 長期にわたる、又は反復ばく露による臓器の障害  
: (H412) 長期継続的影響によって水生生物に有害

注意書き

- 安全対策：(P260) 粉じん／煙／ガス／ミスト／蒸気／スプレーを吸入しないこと。
- ：(P261) 粉じん／煙／ガス／ミスト／蒸気／スプレーの吸入を避けること。
- ：(P264) 取扱い後は体をよく洗うこと。
- ：(P270) この製品を使用する時に、飲食又は喫煙をしないこと。
- ：(P271) 屋外又は換気の良い場所でだけ使用すること。
- ：(P273) 環境への放出を避けること。
- ：(P280) 保護手袋／保護衣／保護眼鏡／保護面を着用すること。
- 応急措置：(P312) 気分が悪いときは医師に連絡すること。
- ：(P314) 気分が悪いときは、医師の診断／手当てを受けること。
- ：(P321) 特別な処置が必要である。
- ：(P302+P352) 皮膚に付着した場合：多量の水で洗うこと。
- ：(P304+P340) 吸入した場合：空気の新鮮な場所に移し、呼吸しやすい姿勢で休息させること。
- ：(P305+P351+P338) 眼に入った場合：水で数分間注意深く洗うこと。次にコンタクトレンズを着用していて容易に外せる場合は外すこと。その後も洗浄を続けること。
- ：(P308+P311) ばく露又はばく露の懸念がある場合：医師に連絡すること。
- ：(P332+P313) 皮膚刺激が生じた場合：医師の診断／手当てを受けること。
- ：(P337+P313) 眼の刺激が続く場合：医師の診断／手当てを受けること。
- ：(P362+P364) 汚染された衣類を脱ぎ、再使用する場合には洗濯をすること。
- 保管：(P405) 施錠して保管すること。
- ：(P403+P233) 換気の良い場所で保管すること。容器を密閉しておくこと。
- 廃棄：(P501) 内容物／容器を国際／国／都道府県／市町村の規則に従って廃棄すること。

#### その他注意事項

- ：GHS分類による注意書きに記載がない場合でも、以降の章に記載された情報を参考に、安全対策/応急措置/保管/廃棄に関し十分な配慮を行うこと。

### 3. 組成及び成分情報

単一製品・混合物の区別：混合物

成分名	含有率(%)	安衛法 (政令番号)	化管法 (種別／管理番号)
プロピレングリコール	40-50	第2-1786号	対象外
水	40-50	対象外	対象外
潤滑油添加剤	10-20	対象外	対象外
カリウム＝オレアート	1-5	第2-404号*1)	対象外
モルホリン	1-5	第2-2207号	対象外

\*1) 2026年4月以降対象

## 4. 応急措置

- |               |  |
|---------------|--|
| 吸入した場合        | ： 被災者を新鮮な空気のある場所に移動し、呼吸しやすい姿勢で休息させること。                               |
|               | ： 気分が悪い時は、医師の診断、手当てを受けること。   |
| 皮膚に付着した場合     | ： 水と石鹼で付着した部分を洗うこと。  |
|               | ： 皮膚刺激が生じた場合、医師の診断、手当てを受けること。  |
| 眼に入った場合       | ： 清浄な水で十分に眼を洗うこと。  |
|               | ： 眼の刺激が持続する場合は、診断、手当てを受けること。   |
| 飲み込んだ場合       | ： 無理に吐かせないで、速やかに医師の手当てを受けること。<br>口の中が汚染されている場合には、水で十分洗うこと。           |
| 最も重要な徴候症状     | ： 飲み込むと、下痢、嘔吐する可能性がある。<br>眼に入ると炎症を起こす可能性がある。<br>皮膚に触れると炎症を起こす可能性がある。 |
| 応急措置をする者の保護   | ： 現在のところ有用な情報なし。   |
| 医師に対する特別な注意事項 | ： 現在のところ有用な情報なし。   |

## 5. 火災時の措置

- |             |  |
|-------------|--|
| 消火剤         | ： 霧状の強化液、泡、粉末又は炭酸ガス消火剤が有効である。<br>初期の火災には、粉末、炭酸ガス消火剤を用いる。<br>大規模火災の際には、泡消火剤を用いて空気を遮断することが有効である。 |
| 使ってはならない消火剤 | ： 棒状の水を用いてはならない。火災を拡大し危険な場合がある。  |
| 特有の危険有害性    | ： 火災時に刺激性、腐食性及び毒性のガスを発生する場合がある。  |
| 特有の消火方法     | ： 火元への燃焼源を断つ。<br>： 周囲の設備等に散水して冷却する。<br>： 火災発生場所周辺の関係者以外の立入りを禁止する。                              |
| 消火を行う者の保護   | ： 消火作業の際は、風上から行い必ず保護具を着用する。  |

## 6. 漏出時の措置

- |                       |  |
|-----------------------|--|
| 人体に対する注意事項、保護具及び緊急時措置 | ： 作業の際には、必ず保護具を着用する。<br>： 大量の場合は、漏洩した場所の周辺にロープを張るなどして、関係者以外の立ち入りを禁止する。   |
| 環境に対する注意事項            | ： 河川・下水道等に流出し、環境汚染を起こさないよう注意する。  |
| 封じ込め及び浄化の方法及び機材       | ： 土砂、ウエス等に吸収させ回収し、その後を完全にウエス等で拭き取る。<br>： 大量の場合は、土砂等でその流れを止め、安全な場所に導いた後、出来るだけ空容器等に回収する。<br>海上の場合、オイルフェンスを展開して拡散を防止し、吸収マットなどで吸い取る。薬剤を用いる場合には国土交通省令・環境省令で定める技術上の基準に適合したものでなければならない。 |
| 二次災害の防止策              | ： 漏出時は、事故の未然防止及び拡大防止を図る目的で、速やかに関係機関に通報する。<br>： 周囲の着火源を取り除く。  |

## 7. 取扱い及び保管上の注意

取扱い

## 技術的対策

- ： 炎、火花又は高温体との接触を避けるとともに、みだりに蒸気を発散させないこと。
- ： 静電気対策を行い、作業衣、靴等も導電性の物を用いる。
- ： 容器から取り出す時はポンプなどを使用すること。細管を用いて口で吸い上げてはならない。飲まない。
- ： 皮膚に触れたり、目に入る可能性がある場合は、保護具を着用する。

## 注意事項

- ： 粉じん、蒸気、スプレーを吸入しないこと。
- ： 換気及び火気などへの注意が必要である。

## 安全取扱注意事項

- ： 『8. 暴露防止及び保護措置』に記載の全体換気、局所排気を行う。

## 接触回避

- ： ハロゲン類、強酸類、アルカリ類、酸化性物質と接触しないよう注意する。

## 衛生対策

- ： この製品を使用する時に、飲食又は喫煙をしないこと。
- ： 取扱い後はよく手を洗うこと。

## 保管

### 安全な保管条件

- ： 直射日光を避け、換気の良い場所に保管する。
- ： ゴミ、水分などの混入防止のため使用後は密栓して保管する。
- ： 熱、スパーク、火炎並びに静電気蓄積を避ける。

### 安全な容器包装材料

- ： 空容器に圧力をかけない。圧力をかけると破裂することがある。
- ： 容器は、溶接、加熱、穴あけ又は切断しない。爆発を伴って残留物が発火することがある。

## 8. 暴露防止及び保護措置

### 管理濃度／許容濃度／濃度基準値

化学名	管理濃度	産業衛生学会	ACGIH	濃度基準値
プロピレングリコール	—	—	—	—
水	—	—	—	—
潤滑油添加剤	—	—	—	—
カリウム＝オレアート	—	—	—	—
モルホリン	—	—	TWA: 20ppm	—

### 設備対策

- ： 作業場には適切な全体換気装置、局所排気装置を設置すること。
- ： 取扱い場所の近くに、眼の洗浄及び身体洗浄のための設備を設置すること。

### 保護具

#### 呼吸用保護具

- ： 呼吸用保護具（防じんマスク/防毒マスク）を着用すること。

#### 手の保護具

- ： 不浸透性の保護手袋を着用すること。

#### 眼、顔面の保護具

- ： 不浸透性の保護眼鏡を着用すること。

#### 皮膚及び身体の保護具

- ： 不浸透性の保護衣、履物を着用すること。

### 特別な注意事項

- ： 現在のところ有用な情報なし。

## 9. 物理的及び化学的性質

### 物理的状态

- ： 液体

### 色

- ： 緑色

### 臭い

- ： ほとんど無臭

### 融点・凝固点（滴点・流動点）

- ： -40.0℃以下（流動点）

沸点、初留点及び沸点範囲	： 情報なし
可燃性	： 情報なし
燃焼又は爆発範囲	： 情報なし
引火点	： なし
自然発火点	： 情報なし
分解温度	： 情報なし
pH	： 10.4～10.6
動粘性率	： 48mm <sup>2</sup> /s (40℃)
溶解度	： 水：任意の割合で可溶
n-オクタノール／水分配係数	： 情報なし
蒸気圧	： 情報なし
密度及び／又は相対密度	： 1.06g/cm <sup>3</sup> (15℃)
相対ガス密度	： 情報なし
粒子特性	： 情報なし

## 10. 安定性及び反応性

反応性	： 通常の使用条件では安定である。
化学的安定性	： 通常の保管条件では安定である。
危険有害反応可能性	： 強酸化剤と反応する可能性がある。
避けるべき条件	： 高熱及び混触危険物質との接触。
混触危険物質	： 強酸類、酸化性物質。
危険有害な分解生成物	： 燃焼の際には一酸化炭素等が発生する可能性がある。

## 11. 有害性情報

製品の危険有害性区分については、混合物の分類基準に基づいて分類を実施した。

急性毒性（経口）

プロピレングリコール	： 区分に該当しない 【分類根拠】 （1）～（3）より、区分外とした。 【根拠データ】 （1）ラットのLD50：22,000 mg/kg（SIDS（2004）） （2）ラットのLD50：8,000～46,000 mg/kg（EPA Pesticide（2006）） （3）ラットのLD50：21,000～33,700 mg/kg（PATTY（6th, 2012））  【参考データ等】 （4）マウスのLD50：24,900 mg/kg（SIDS（2004）） （5）マウスのLD50：23,000～24,900 mg/kg（EPA Pesticide（2006）） （6）マウスのLD50：23,900～31,800 mg/kg（PATTY（6th, 2012））
------------	--

急性毒性（経皮）

プロピレングリコール	： 区分に該当しない LD50=20800.00mg/kg
------------	-------------------------------

急性毒性（気体）

プロピレングリコール	： 区分に該当しない 【分類根拠】 GHSの定義における液体である。
------------	---------------------------------------

急性毒性（蒸気）

プロピレングリコール	： 分類できない 【分類根拠】 データ不足のため分類できない。
------------	------------------------------------

急性毒性（粉塵ミスト）

プロピレングリコール

： 分類できない 【分類根拠】  
データ不足のため分類できない。

皮膚腐食性／刺激性

モルホリン

： 区分1 本物質はヒトの皮膚に対して腐食性を示すとの記述（SIDS（2015））、及びウサギにおける皮膚刺激性試験において本物質の適用により壊死を生じるとの複数の試験報告（EHC 179（1996）、IARC 47（1989）、ACGIH（7th, 2001）、PATTY（6th, 2012）、SIDS（2015））から、区分1とした。なお、EU CLP分類において本物質はSkin Corr. 1B に分類されている（ECHA CL Inventory（Access on June 2017））。

眼に対する重篤な損傷性／眼刺激性

モルホリン

： 区分1 皮膚腐食性／刺激性が区分1に分類されていることから、区分1とした。なお、ヒトにおいて本物質の適用により角膜浮腫が生じるとの報告（IARC 47（1989））、及び強度の刺激性があるとの記述（ACGIH（7th, 2001）、IARC 47（1989）、PATTY（6th, 2012））があり、ウサギを用いた眼刺激性試験で本物質の適用により浮腫、角膜混濁、ぶどう腫（staphyloma）を生じたとの報告（EHC 179（1996））がある。分類ガイダンスに従い、区分を変更した。

呼吸器感作性

プロピレングリコール

： 分類できない 【分類根拠】  
データ不足のため分類できない。

皮膚感作性

プロピレングリコール

： 区分に該当しない 【分類根拠】  
（1）～（4）より、区分外とした。

【根拠データ】

（1） ヒトに対する皮膚パッチテスト（n=104、GLP）で、本物質50%溶液の半閉塞/閉塞適用による感作誘導後、50%溶液の半閉塞/閉塞適用で感作を誘発させたところ、それぞれ陽性反応は示さなかったとの報告がある（SIDS（2004））。

（2） ヒトに対する皮膚パッチテスト（ドレイズ変法、n=204）で、本物質12%溶液の閉塞適用による感作誘導後、12%溶液の閉塞適用で感作を誘発させたところ、陽性反応は示さなかったとの報告がある（SIDS（2004））。

（3） モルモットを用いたMaximization試験（GPMT）7件のうち1試験のみ弱い陽性が見られたが、他の6試験は全て陰性だったとの報告がある（J. Am. Coll. Toxicol., 13（1994））。

（4） マウスを用いた皮膚感作性試験（OECD TG429、LLNA法、n=4）において本物質50%溶液でStimulation Index（SI値）は1.2、本物質原体でSI値1.6だったとの報告がある（REACH登録情報（Accessed Oct. 2018））。

生殖細胞変異原性

## プロピレングリコール

： 分類できない 【分類根拠】  
(1)～(3)より、ガイダンスに従い分類できないとした。

### 【根拠データ】

(1) ラットの優性致死試験（単回又は5日間経口投与）は陰性であった（SIDS（2004））。  
(2) ラットの骨髄を用いたin vivo染色体異常試験（単回又は5日間経口投与）では陰性であった（SIDS（2004））。  
(3) マウスの骨髄を用いたin vivo小核試験（単回腹腔内投与）では陰性であった（SIDS（2004））。

### 【参考データ等】

(4) 細菌を用いた2件の復帰突然変異試験は陰性であった（SIDS（2004））。  
(5) ヒトリンパ球を用いたin vitro染色体異常試験では陰性であった（SIDS（2004））。  
(6) 哺乳類培養細胞（CHO）を用いたin vitro染色体異常試験では陽性（S9-）の結果が得られたが、細胞毒性が発現する高濃度での結果であった（SIDS（2004））。

## 発がん性

### プロピレングリコール

： 分類できない 【分類根拠】  
発がん性に関して、利用可能なヒトを対象とした報告はない。  
利用可能な動物試験結果は(1)の動物種1種に限られ、データ不足のため分類できない。

### 【根拠データ】

(1) ラット（30匹/性/群）の2年間混餌投与による発がん性試験（雄：200～1,790 mg/kg/day、雌：300～2,100 mg/kg/day）では腫瘍発生の増加はみられなかった（SIDS（2004））。  
(2) 国内外の分類機関による既存分類はない。

### 【参考データ等】

(3) イヌ（5匹/性/群）を用いた2年間混餌投与（2,000、5,000 mg/kg/day）による慢性毒性試験で、腫瘍発生頻度に変化はみられなかった（SIDS（2004））。  
(4) 雌マウス（例数不明）に一生経口投与（2～21 mg/匹/day）した試験で、皮膚腫瘍の増加はみられていない（SIDS（2004））。  
(5) ラットの耳介に10～14ヵ月間塗布（用量不明）したが、皮膚腫瘍の発生増加はみられなかった（SIDS（2004））。

## 生殖毒性／授乳への影響

### プロピレングリコール

： 分類できない／分類できない 【分類根拠】  
(1)の経口投与による繁殖試験や、(2)、(3)の妊娠動物を用いた発生毒性試験では生殖発生毒性がみられなかったことから、分類できないとした。

### 【根拠データ】

(1) マウスを用いた飲水投与による連続交配試験において、10、100 mg/kg/dayを最長98日間投与したが、F0及びF1親動物に投与に関連した生殖影響はみられず、F1及びF2児動物に投与に関連した生存率、成長への影響はみられなかった（SIDS（2004）、環境リスク初期評価第6巻：暫定的有害性評価シート（2008））。  
(2) 妊娠ラットの器官形成期（妊娠6～15日）に強制経口投与した発生毒性試験では、1,600 mg/kg/dayまでの用量で母動物、胎児ともに有害影響はみられなかった（SIDS（2004）、環境リスク初期第6巻：暫定的有害性評価シート（2008））。  
(3) 妊娠ウサギの器官形成期（妊娠6～18日）に強制経口投与した発生毒性試験では、12～267 mg/kg/day群で母動物に死亡例（用量相関なし）がみられたが、最高用量の1,230 mg/kg/dayまで、胎児に発生影響はみられなかった（SIDS（2004）、環境リスク初期第6巻：暫定的有害性評価シート（2008））。

【参考データ等】

(4) 妊娠マウスの器官形成期(妊娠6～15日)に強制経口投与した発生毒性試験では、1,600 mg/kg/dayまでの用量で母動物、胎児ともに有害影響はみられなかった(SIDS(2004)、環境省リスク評価第6巻：暫定的有害性評価シート(2008))。

(5) 妊娠ラットの器官形成期(妊娠6～15日)に吸入ばく露した発生毒性試験では、300 ppmまでの用量で母動物、胎児ともに有害影響はみられなかった(ATSDR addendum(2008))。

(6) 妊娠ウサギの器官形成期(妊娠7～19日)に吸入ばく露した発生毒性試験では、300 ppmまでの用量で母動物、胎児ともに有害影響はみられなかった(ATSDR addendum(2008))。

特定標的臓器毒性(単回ばく露)

プロピレングリコール

： 区分1(血液系、中枢神経系)、区分3(麻酔作用) 【分類根拠】

(1)～(3)のヒトの知見より、中枢神経系及び血液系が標的臓器と考えられる。また、(3)、(4)の実験動物のデータからも神経系及び血液系が標的臓器と考えられる。また(3)より麻酔作用がみられている。以上より、区分1(中枢神経系、血液系)、区分3(麻酔作用)とした。

【根拠データ】

(1) 2歳の男児が約1.75～2.25%の本物質を含むヘアジェルを誤って約3オンス摂取した後に中枢神経抑制及び代謝性アシドーシスを生じた。男児は嘔吐を繰り返し、嗜眠になり、強い痛みにもかかわらず反応しなくなった(ATSDR addendum(2008)、SIDS(2004))。

(2) 経口摂取による急性中毒症状は眠気から知覚麻痺、意識喪失、昏睡に至る。他の徴候としては、血清の高浸透圧、乳酸アシドーシス、及び低血糖である(IPCS PIM 433(Accessed Oct. 2018))。

(3) 高用量の経口摂取による急性毒性症状は、中枢神経抑制と麻酔作用である。ラット及びマウスでは運動失調、眼瞼下垂、自発運動減少、体幹及び四肢の緊張、及び呼吸の減少である(ATSDR addendum(2008))。

(4) ラットの単回経口投与試験では、区分2範囲の730 mg/kg以上で赤血球数・ヘモグロビン・ヘマトクリット値の減少、及び網状赤血球・血漿ヘモグロビン・浸透圧の増加がみられた。また、赤血球の電顕観察で表面粗造、膜の破壊もみられた(SIDS(2004)、ATSDR addendum(2008))。

モルホリン

： 区分1(呼吸器系) 本物質の液体と蒸気は粘膜刺激性であり、本物質を取り扱っていた研究者自身が鼻の刺激と咳を生じたことを報告している(ACGIH(7th, 2001))。実験動物ではラットの4時間吸入ばく露試験で、区分1範囲の71 ppm(0.252 mg/L)で呼吸数の増加と肺の刺激所見が認められたとの報告がある(PATY(6th, 2012))。ヒトでの情報は1例のみであるので根拠としなかったが、動物試験で肺への影響が区分1の用量でみられていることから、区分1(呼吸器)とした。

特定標的臓器毒性(反復ばく露)



## プロピレングリコール

： 区分1(呼吸器系、中枢神経系) 【分類根拠】

(1)、(2)のヒトのデータより中枢神経系が本物質の標的と考えられ、区分1(中枢神経系)を採用した。また、(3)の実験動物のデータより、吸入経路での影響は区分1の用量で呼吸器への影響がみられたことから、区分1(呼吸器)とした。なお(3)のデータにおける試験濃度の160 mg/m<sup>3</sup> (51.4 ppm)は飽和蒸気圧濃度(108.9 ppm)の90%より低く、ミストを含まない蒸気と考えられることから、蒸気の基準を適用した。

### 【根拠データ】

(1)15カ月の若年者が内服治療の溶媒として本物質を繰り返し大量に摂取した結果、低血糖と中枢神経抑制による有害症状を生じた。服薬中止により症状は急速に改善した(PATY (6th, 2012))。

(2)本物質を含む治療薬を1年以上内服した後に11歳の少年が大発作を起こした。この他、本物質に溶解したフェニトインを内服した患者で中枢抑制症状の報告がある(IPCS PIM 443 (Accessed Oct. 2018))。

(3)ラットに本物質を13週間吸入ばく露(160~2,200 mg/m<sup>3</sup>、6時間/日、5日/週)した試験では、区分1の範囲内である160 mg/m<sup>3</sup> (ガイダンス値換算：0.12 mg/L)以上で鼻腔の出血、眼の分泌物の増加、1,000 mg/m<sup>3</sup>以上で、鼻腔に杯細胞数とムチンの増加を伴う呼吸上皮の肥厚がみられた(環境省リスク評価第6巻：暫定的有害性評価シート(2008))。

### 【参考データ等】

(4)ラットに15週間混餌投与した試験では、50,000 ppm (約2,500 mg/kg/day)で、有害性影響はみられなかった(SIDS (2004))。

(5)ラットに140日間飲水投与した試験では、25%以上の濃度では飲水量減少による飢餓と脱水により全例が死亡した。NOAELは10% (13,200 mg/kg/day)と報告されている(SIDS (2004))。

(6)ラットに104週間混餌投与した試験では、50,000 ppm (雄：1,700 mg/kg/day、雌：2,100 mg/kg/day)有害性影響はみられなかった(SIDS (2004))。

## モルホリン

： 区分1(呼吸器系) ヒトに関する情報はない。

実験動物については、ラットを用いた蒸気による13週間吸入毒性試験(6時間/日、5日/週)において、区分2のガイダンス値の範囲内である340 mg/m<sup>3</sup> (90日換算：0.25 mg/L)以上で鼻腔の限局性壊死・壊死性細胞片、920 mg/m<sup>3</sup> (90日換算：0.66 mg/L)で鼻甲介・上顎甲介・鼻中隔・鼻腔前部の限局性びらん及び扁平上皮化生の増加、慢性肺炎がみられ(環境省リスク評価第4巻(2005)、EHC 179 (1996)、ACGIH (7th, 2001)、PATY (6th, 2012)、IARC 47 (1989))、ラットを用いた蒸気による104週間吸入毒性試験において区分1のガイダンス値の範囲内である180 mg/m<sup>3</sup> (0.18 mg/L)以上で限局性の皮膚の壊死、鼻甲介骨壊死、区分2のガイダンス値の範囲内(蒸気)である540 mg/m<sup>3</sup> (0.54 mg/L)で鼻腔内で鼻甲介上皮の炎症及び過形成、眼で角膜炎、水腫、潰瘍等がみられている(環境省リスク評価第4巻(2005)、EHC 179 (1996)、ACGIH (7th, 2001)、PATY (6th, 2012))。なお、この104週間の試験において鼻甲介骨壊死が180 mg/m<sup>3</sup> (0.18 mg/L)で有意にみられているが、環境省リスク評価第4巻(2005)以外の評価書では540 mg/m<sup>3</sup> (0.54 mg/L)にのみ呼吸器系の影響の記載がある。

以上、主な影響として、刺激性に起因したと考えられる鼻腔への影響がみられていることから区分1(呼吸器)とした。

## 誤えん有害性

### プロピレングリコール

： 分類できない 【分類根拠】

データ不足のため分類できない。

## 12. 環境影響情報

製品の危険有害性区分については、混合物の分類基準に基づいて分類を実施した。

水生環境有害性 短期（急性）

カリウム＝オレアート : 区分1 甲殻類（オオミジンコ）の48時間EC50 = 0.57 mg/L  
(AQUIRE, 2012) から区分1とした。

水生環境有害性 長期（慢性）

カリウム＝オレアート : 区分1 信頼性のある慢性毒性データは得られていない。急速分解性に関する適切なデータが得られておらず、急性毒性区分1であることから区分1とした。

オゾン層有害性

プロピレングリコール : 分類できない データなし

生態毒性・魚毒性

: 急性魚類 Pimephales promelas 96h LC50 51400 mg/L  
急性魚類 Oncorhynchus mykiss 96h LC50 51600 mg/L  
急性魚類 Pimephales promelas 96h LC50 710 mg/L(プロピレングリコール)

生態毒性・無脊椎動物毒性

: 有用な情報なし(プロピレングリコール)

生態毒性・藻類毒性

: 急性藻類 Pseudokirchneriella subcapitata 96h EC50 19000 mg/L(プロピレングリコール)

残留性・分解性

: 有用な情報なし(プロピレングリコール)

生体蓄積性

: 有用な情報なし(プロピレングリコール)

土壌中の移動性

: 有用な情報なし(プロピレングリコール)

### 1 3. 廃棄上の注意

残余廃棄物

: 事業者は残余廃棄物を自ら処理するか又は都道府県知事の許可を受けた産業廃棄物処理業者若しくは地方公共団体がその処理を行っている場合には、そこに委託して処理する。

: 廃棄においては、関連法規並びに地方自治体の基準に従うこと。

: 焼却する場合は、安全な場所で、かつ、燃焼又は爆発によって他に危害又は損害を及ぼす恐れのない方法で行うこと。その燃えがらについては、廃棄物の処理及び清掃に関する法律施行令に定められた基準以下であることを確認しなければならない。

汚染容器及び包装

: 空容器を廃棄する場合は、内容物を完全に除去した後、廃棄物処理法及び関連法規並びに地方自治体の基準に従い処理する。

### 1 4. 輸送上の注意

国連番号

: なし

品名（国連輸送名）

: なし

国連分類

: なし

容器等級

: なし

輸送の特定の安全対策及び条件

: 容器が著しく摩擦又は動揺を起こさないように運搬する。

: その他関係法令の定めるところに従う。

国内規制

陸上輸送 : 消防法、労働安全衛生法等に定められている運送方法に従う。

海上輸送 : 船舶安全法に定められている運送方法に従う。

航空輸送 : 航空法に定められている運送方法に従う。

### 1 5. 適用法令

消防法

: 非危険物

化学物質排出把握管理促進法

: 非該当

労働安全衛生法

- ： 第57条の2 通知対象物（プロピレングリコール、カリウム＝（Z）－オレアート【2026年4月以降対象】、モルホリン）
- ： 第57条 名称表示物質（プロピレングリコール、カリウム＝（Z）－オレアート【2026年4月以降対象】、モルホリン）
- ： 第594条の2 皮膚刺激性有害物質（モルホリン）
- ： 第594条の2 皮膚吸収性有害物質（モルホリン）
- ： 危険物 引火性の物（モルホリン）

毒劇物取締法

- ： 非該当

海洋汚染防止法

- ： 有害液体物質Y類物質

船舶安全法

- ： 腐食性物質

航空法

- ： 腐食性物質

## 16. その他の情報

安全データシートは、危険有害な化学製品について、安全な取扱いを確保するための参考情報として、取扱事業者提供されるものです。取扱事業者は、これを参考として、自らの責任において、個々の取扱い等の実態に応じた適切な処置を講ずることが必要であることを理解した上で、活用されるようお願いいたします。従って、本データシートそのものは、安全の保証書ではありません。また、記載されている情報は改訂日時点での情報を基に作成したものであり、その内容について保証するものではありません。各種法令改正や製品情報の改訂により今後も内容が変更されますので、販売・流通事業者は、取扱事業者に対し、常に最新の安全データシートを提供するようにお願いします。

本SDSにおいて労働安全衛生法の通知対象物質の含有量が幅表示の場合は、営業秘密である場合を含みます。